

投げられて空からおちてくるまでの 花籠（はなかご）のような生を思えり

植 木 朝 子

奨励者紹介〔うえき・ともこ〕

同志社大学副学長

同志社大学文学部教授

〔研究テーマ〕日本中世における歌謡および芸能の研究

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなつた。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

（ヨハネの黙示録 21章1―4節）

ただいまご紹介いただきました植木と申します。

本日の逝去者追悼礼拝にお越しくくださった皆様の中には、大切な人を亡くされて、深い悲しみと苦しみを抱えておられる方もおいでかと存じます。今日、私がお話しするのは、ごく個人的な経験です。この場でそういう個人的なお話をさせていただくことについては、少し迷いもありましたが、人の死を悼むことは、まことに個人的な営みであり、個別に語ることでしかそれはなし得ないのではないかと考えるに至りました。

本日のテーマとして掲げました、「投げられて空からおちてくるまでの花籠（はなかご）のような生を思えり」というのは、24歳で亡くなった歌人、安藤美保の歌です。

それぞれの悲しみ、

それぞれの表現

彼女は、お茶の水女子大学および大学院を通して、私の親しい友人でした。しかし、修士課程2年の夏、1991年8月28日、不慮の事故により、帰らぬ人となりました。

彼女が突然いなくなってしまったことをどう受け止めたらいいのか分からず、混乱したまま日々が過ぎていきました。世界と自分の間に膜ができてしまって、私はその透明な膜の中から、遠い気持ちで世間を見ているような感じてした。彼女はいなくなってしまったのに、なぜ、淡々と時は過ぎていくのだろう。私はなぜ、お腹がすいたり、眠くなったり、普通に生活しているのだろう。違和感や罪悪感が押し寄せてきて、何も手に付かず、毎日ぼんやりしていました。夏休み明け、大学院の友人たちに会ったら、まず何を置いても彼女のことを語り合いたいと思っていましたが、友人たちは、着々と修士論文を書いたり、就職活動をし

たりしています。彼女の名前はほとんど話題に上りません。私はずっと彼女のことを考え続けているのに、友人たちはずいぶん薄情なのではないか、と非難したいような気持ちにもなりました。彼女を知っている別の大学の先生にこのことをこぼすと、先生はただひと言、あなたは、自分と同じ悲しみ方をしない人に厳しいのね、とおっしゃいました。その言葉に私は、はっとしました。安藤さんを話題にしない友人が、彼女の死を悲しんでいないとは限らないのに、私は冷淡だと決め付けていました。心の内を知りもしないで非難がましい思いを抱くなどとは、全く勝手なものです。生きている時の彼女から、私は多くの優しさと励ましを与えられましたが、死してもなお、彼女はこうして、私に私自身の狭量さを気づかせてくれたのです。

共感と救い

さて、彼女は不慮の事故によって亡くなったと申しましたが、その事故は、日本中世文学を専攻する大学院生たちが指導教授と共に比叡山を歩いている時に起こりました。急斜面を登っている時に彼女は足を滑らせ、転落してしまったのです。私は、その旅行に一緒に行くはずでしたが、直前に家族に病人が出て、急遽キャンセルしてしまいました。それで、私は現場にいなかった人間として、事故に関しては一定の距離を置いた立場で彼女の死をただただ悲しんでいましたし、その悲しみをご遺族にもお伝えするのが大切なことのように思っ、せっせとお手紙を出したりしていました。

事故から9年がたった2000年に、彼女のお父様が、『白いパラソル』（ながらみ書房）という本を出されました。その中の記述に、私は凍りつく思いでした。事故のひと月あと、現場を歩いた時に湧き上がってきた思いをお書きになった箇所に、「参加者が予定どおり多かったら、レンタカーでここまで来たのだろうか……？」とありました。私が急にキャンセルしたことによって、一行は5人になりました。だから、1台の車に乗ってしまったのです。私も参加して、予定どおり総勢6人であったなら、1台の自動車には乗り切れず、したがって山奥までは行かなかった可能性が高いでしょう。そうか、お父様は、ずっと私に対して許しがたいお気持ちを抱いておられたのだと、その時、やっと気づいたのです。そのことに全く思い至らず、暢気にお手紙を書いていたなんて、本当に恥ずかしい。事故の現場にいなかったことで、自分の責任について思いめぐらすこともなかった脳天気ぶりが我ながら情けなく、いたたまれない思いでいっぱいでした。もちろん、ご遺族は私に対して一切責めるようなことはおっしゃいませんでした。その本の記述にしても、大変抑えた筆致であり、正面からの批判ではありません。ただ、私は一緒に行くことと約束していたのに、急に行けなくなったことに対して、どこかやましい気持ちをもっていたからこそ、胸を突かれるような思いがしたのです。

先に、人それぞれの悲しみ方についてお話ししましたが、ご家族とのやりとりによって、私は自分よりもっと深い悲しみの中にいる方たちに対する、自分の無力さに打ちのめされるばかりでした。

お母様が静かにおっしゃっていたのは、気持ちは分かると言われると腹が立つ、何が分かるのかという気になる、体を大事にとと言われると腹が立つ、自分のことなど気遣ってもらわなくていいのに、とんちんかんだと思う、ということでした。肝腎な時に言葉は役に立たないのでしょうか。日本文学を勉強し、言葉を研究対象にしている私としては残念な気持ちにもなります。でも、お母様が救われたとおっしゃったエピソードがあります。安藤さんの若すぎる死を知ったお知り合いの方が、ただひと言、この世は無常でございませうね、と言って、はらはらと涙をこぼされたというのです。その方も、実はお子さんを亡くしておられたの

だそうです。深い共感に裏打ちされた言葉が、人を救い、心慰めるものになるのだということは、私自身の慰めにもなりました。

遺歌集『水の粒子』

藤原良経を中心とした中世和歌を研究していた安藤さんは、短歌結社・竹柏会に所属していました。結社誌『心の花』を通して佐佐木幸綱氏に師事し、将来を期待された歌人でもありました。死の翌年、ご両親によって編まれた遺歌集が『水の粒子』（ながらみ書房 1992年）です。ここに1冊持ってきました。昨年には文庫化もされています。

彼女の死を受け入れがたく混乱の極みにあった私は、この歌集を、むさぼるように何度も何度も読みました。『水の粒子』という歌集の題は、次の鮮烈な恋歌によります。

君の眼に見られいるとき私（わたくし）はこまかき水の粒子に還る

大学で、毎日のように話していましたが、彼女の恋も孤独も、私は本当には何も知らなかったのです。透き通った清らかな孤独とでもいうべきものを、彼女は繰り返し歌っています。次に一部を紹介させていただきます。

寒天質に閉じこめられた吾（あ）を包み駅ビル四階喫茶室光る
誰からも拒まれている感じする暗き書庫より戻りし我は
悔いありて歩む朝（あした）をまがなしく蜘蛛はさかさに空を見ており
ずいずいと悲しみ来れば一匹のとんぼのように本屋に入る
指先まで涙でふくらみている我を電車は運びまた持ち帰る
誰からも逃れたき思い抱く図書室の窓に若葉の揺れいる

テーマに掲げた一首「投げられて空からおちてくるまでの花籠のような生を思えり」は、彼女の早すぎる死を照らし合わせてみると、まことに意味深長なものとして受け止められますが、はかなくも美しい、人の一生というものが普遍的に捉えられていると言えるでしょう。

白抜きの文字のごとあれしんしんと新緑をゆく我のこれから

真っ白な将来に無限の可能性があり、生命力に満ちた新緑の季節、まさに人生これからという時に唐突に終わらざるを得なかった命を思うと、本当に痛ましい限りです。

彼女は、山に囲まれ、遠くに海に見える美しい墓所に眠っています。そこには、次の歌の刻まれた歌碑が建てられています。

緻密に緻密かさねて論はつくられぬ崩されたくなく眼をつむりおり

卒業論文を書きあげて巣立っていく学生さんたちに、私はしばしばこの歌を紹介します。新たな環境に身を置き、慌ただしく忙しい日々を過ごす中でも、論文作成時に経験したような、緻密に緻密をかさね、物事を深く考える静謐な時間をもってほしいと思うからです。

人は二度死ぬ

以上、歌集『水の粒子』から、いくつかの歌をご紹介します。彼女のことを知ってほしいという、私の勝手な願いからです。よく引き合いに出される言葉ですが、人は二度死ぬ、と言います。一度目は肉体的な死、二度目は忘却による死です。遺された私にできるのは彼女を忘れないこと、彼女について語り続けることだけです。

兼好法師が記した随筆『徒然草』には、「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」（一人静かに書物に向き合って、会ったこともない昔の人を友とするのは、この上なく心慰められるわざである）という一文があります。私にとって彼女は、見ぬ世の人ではありませんが、『水の粒子』という書物が、静かにそれと向き合う読者を得続けることになれば、彼女はこの先も、二度目の死を迎えることはありません。

死者と共に

彼女と最後に話したのは、修士2年の夏、大学院博士課程受験をめぐることでした。私は試験に落ちるかもしれないという不安や、もし受かっても将来の保証はないのだという心配から、受験にためらいがありました。どうするの、と尋ねると、彼女はきっぱりと、受ける、と言いました。その凛とした美しい横顔を私は決して忘れません。自分は勉強がしたい、勉強するために一番よい環境に身を置きたい、だから受験する。ひたむきな力のある言葉でした。私は目の覚めるような思いがしました。私がぐよくよしているのは、全く本質的な事柄に関してではなかったのです。勉強がしたいから。学問に対する純粋な熱意のこもった重い一言でした。

私は博士課程に進学し、関東の短大で数年間教えた後、2005年に同志社大学に着任しました。比叡山を眺めるたびに、彼女が見守ってくれているような気持ちになります。身勝手な感傷にすぎないかもしれませんが。しかし、私たちと共にいてくれるのは、生きている者たちだけではありません。たとえば書物の中で出会っただけの人だとしても、多くの死者によって、私たちは支えられているのだと思います。

最後に、微笑ましく楽しい一首を紹介します。

葉つき生姜たばねて持てるその人を定家と思い見ており夢で

定家とは、『新古今和歌集』や『小倉百人一首』の撰者として名高い鎌倉時代の歌人・藤原定家です。夢の中に葉つき生姜を抱えた姿で定家が出てきた、ということです。実は、彼女の夢に現れた定家はネギを持っていたそうですが、ネギでは歌にならないから、と言っていました。彼女自身もまた、見ぬ世の友である死者・定家と、魂の対話をしていたのでした。

この世を去ってしまった彼女を、大切な人たちを、いつも忘れず、いつまでも偲び続けていきたいと思
います。

ご清聴ありがとうございました。

2019年4月24日 今出川水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録